

# Prospective evaluation of common hepatic duct histopathology at the time of choledochal cyst excision ranging from children to adults

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2022-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 二階, 公貴 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002813">https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002813</a>

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2526 号

Morphologic and Immunohistochemical features of the anastomotic regions in choledochal cyst cases

胆道拡張症における総肝管吻合部での病理学的評価・胆管癌発生リスクの検討

二階 公貴 (にかい こうき)

博士 (医学)

#### 論文審査結果の要旨

本論文は、胆道拡張症(CC)の根治術(総肝管空腸吻合)の吻合に用いられる総肝管の病理組織像を前向きに検討した研究である。CC術後に、吻合部狭窄や胆管癌が生じうるが、これら合併症と総肝管病理組織像との相関を検討した報告はない。また、本研究では、小児と成人CC例の双方で調べていることは特筆に値する。

2018 - 2021年の期間に根治術を施行したCC 32症例(成人9例, 小児23例)を対象とした。検体は吻合部となる総肝管に接した遠位側総肝管より採取した。得られた総肝管の①粘膜上皮形態(HE染色) ②慢性炎症の程度(Nrf2免疫染色) ③過形成・細胞増殖能(Ki-67免疫染色) ④前癌病変の有無(S100P免疫染色) ⑤, ⑥発癌のリスクの評価(p53, CA19-9免疫染色) ⑦線維化の程度(Masson's Trichrome[MT]染色)と患者因子(術時年齢、症状、CC病型: 嚢腫型・紡錘型、術式)との関連性を検討した。その結果、総肝管の粘膜上皮残存率(0-90%: 中央値=20%)の上昇と、術時年齢(0.3-74歳: 平均値=15.3歳)の増加との間に有意な正相関を示した( $r^2=0.22$ ,  $p=0.007$ )。粘膜上皮残存率とその他の因子(症状、CC病型、術式)の間には有意差を認めなかった。免疫染色に関しては、Nrf2とKi-67で陽性症例を各々6例認めたが、双方とも、小児と成人の間で有意差を認めなかった。病型では、Nrf2で有意差を認めなかった一方、Ki-67では嚢腫型に陽性傾向が強かった(26% vs 0%:  $P=0.07$ )。MT染色は、術時年齢と逆相関の傾向を認めた一方で、Nrf2と正相関の傾向を示した。

今回の前向き研究で、CC根治術の吻合部総肝管は、興味深いことに予想に反し、罹患期間の短い小児で成人よりも粘膜上皮残存率が低く、慢性炎症・線維化の程度も成人と同様であることが初めて示唆された。この知見は臨床的に極めて意義のある論文である。

よって、本論文は博士(医学)の学位を授与するに値するものと判定した。